

シメオンが感謝の気持ちで伊吹に示したと同時に、伊吹の唇には再びシメオンの唇が重ねられた。

その唇から舌が突き出されると伊吹の唇は分り切っているようにかすかに開きシメオンの舌を受け入れた。

シメオンの舌は伊吹の舌先を求め少しさまよったが触れ合った次の瞬間たわむれるように舌先同士を上下に振れ合わせた。

その間伊吹の頭の中はかすかな快感に染まりゆったりと広がっていった。

うつとりと口づけにともなう快感に染まっているとシメオンの手がスカートの中からブラウスを引っ張り出そうとしている感覚がする。

伊吹は一瞬目を薄く開けると深い口づけを交わすことに集中するために再び瞳を閉じシメオンのやりたいうようにやらせた。

シメオンの手はブラウスを引き抜くことでできた隙間から潜り込むと伊吹の下着ごしに撫で始める。

手は背中に戻されホックを簡単に外すと手は前に回りブラジャーとの間にできた隙間から直接素肌に触れる。

柔らかく、愛おし気に撫でまわした後そつと遠慮しがちに何度かもむと唇と同時に離れた。

シメオンの腕はぎゅっと伊吹を抱きしめると愛おし気に髪を撫で始めた。

シメオンの胸の中で体温を感じながらされるがままになっていると指先であごが持ち上げられる。

再び唇が重ねられ、先ほどと同じように舌先でのたわむれが始まる。

今度は先ほどよりも少し積極的に、シメオンの舌先は上下に動かすかと思っていた伊吹に肩すかしを食らわすように歯の裏側へと向かい歯肉をくすぐるように愛撫した。

「舌先チロチロの方が好きなんだけど？」